日蓮大聖人御書全集

太田入道殿御返事

おおたにゅうどうどのごへんじ

新版1358～1363

太田入道殿御返事

建治元年('75)11月3日　54歳　大田乗明

貴札、これを開いて拝見す。御痛みのこと、一たびは歎き、二たびは悦びぬ。

維摩詰経に云わく「その時、長者・維摩詰、自ら念えらく『寝ねて牀に疾む』。その時、仏、文殊師利に告げたまわく『汝、維摩詰に行詣して疾を問え』と」云々。

大涅槃経に云わく「その時、如来乃至身に疾有るを現じ、右脇にして臥したもう。彼の病人のごとくす」云々。法華経

に云わく「少病少悩」云々。止観の第八に云わく「毘耶に偃臥するがごときは、疾に託して教えを興す乃至如来は滅に寄せて常を談じ、病に因って力を説く」云々。

また云わく「病の起こる因縁を明かすに、六つ有り。一には四大の順ならざるが故に病む。二には飲食の節ならざるが故に病む。三には坐禅の調わざるが故に病む。四には鬼便りを得。五には魔の所為なり。六には業の起こるが故に病む」云々。大涅槃経に云わく「世に三人のその病治し難きもの有り。一には大乗を謗ず。二には五逆罪あり。三に

は一闡提なり。かくのごとき三病は、世の中の極重なり」云々。また云わく「今世に悪業成就し乃至必ず応に地獄なるべし乃至三宝を供養するが故に、地獄に堕ちずして現世に報いを受く。いわゆる頭と目と背との痛みなり」等云々。止観に云わく「もし重罪有るも乃至人中に軽く償う。これはこれ業の謝せんと欲するが故に病むなり」云々。

竜樹菩薩、大論に云わく「問うて云わく、もししからば、華厳経乃至般若波羅蜜は秘密の法にあらず。しかるに法華等は乃至譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬となすがごと

し」云々。天台、この論を承けて云わく「譬えば、良医の能く毒を変じて薬となすがごとし乃至今経に記を得るは、即ちこれ毒を変じて薬となす。故に、論に云わく『余経は秘密にあらず、法華を秘密となす』と」云々。止観に云わく「法華能く治す。また称して妙となす」云々。妙楽云わく「治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」云々。

大経に云わく「その時、王舎大城の阿闍世王その性弊悪にして乃至父を害し已わって、心に悔熱を生ず乃至心悔熱するが故に、遍体に瘡を生ず。その瘡、臭穢にして附近

すべからず。その時、その母にして韋提希と字づくるものは、種々の薬をもってためにこれを傅く。その瘡、ついに増して降損有ることなし。王即ち母に白す。『かくのごとき瘡は心に従って生ず。四大より起こるにはあらず。もし衆生に能く治する者有りと言わば、この処有ることなけん』と」云々。「その時、世尊・大悲導師、阿闍世王のために月愛三昧に入り、三昧に入り已わって、大光明を放ちたもう。その光、清涼にして、往って王の身を照らすに、身の瘡即ち愈えぬ」云々。平等大慧の妙法蓮華経の第七

に云わく「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。もし人病有らんに、この経を聞くことを得ば、病は即ち消滅して、不老不死ならん」云々。

已上、上の諸文を引いて、ここに御病を勘うるに、六病を出でず。その中の五病はしばらくこれを置く。第六の業病、最も治し難し。はたまた、業病に軽き有り重き有って、多少定まらず。なかんずく、法華誹謗の業病、最第一なり。神農・黄帝・華佗・扁鵲も手を拱き、持水・流水・耆婆・維摩も口を閉ず。ただ釈尊一仏の妙経の良薬に限

ってこれを治す。

法華経に云わく、上のごとし。大涅槃経に法華経を指して云わく「もし、この正法を毀謗するも、能く自ら改悔し、正法に還帰することあらば乃至この正法を除いてさらに救護することなし。この故に応当に正法に還帰すべし」云々。荊渓大師云わく「大経自ら法華を指して極となす」云々。また云わく「人の地に倒れて、還って地より起くるがごとし。故に正の謗をもって邪の堕を接す」云々。

世親菩薩は本小乗の論師なり。五竺の大乗を止めんが

ために、五百部の小乗論を造る。後に無著菩薩に値い奉って、たちまちに邪見を翻し、一時にこの罪を滅せんがために、著に向かって、舌を切らんと欲す。著、止めて云わく「汝、その舌をもって大乗を讃歎せよ」。親、たちまちに五百部の大乗論を造って小乗を破失す。また一つの願を制立せり。「我、一生の間、小乗を舌の上に置かじ」。しかして後、罪滅して弥勒の天に生ず。

馬鳴菩薩は東印度の人、付法蔵の第十三に列なれり。本外道の長たりし時、勒比丘と内外の邪正を論ずるに、その

心言下に解けて、重科を遮せんがために、自らの頭を刎ねんと擬す。謂うところは「我、我に敵して堕獄せしめん」。勒比丘、諫め止めて云わく「汝、頭を切ることなかれ。その頭と口とをもって大乗を讃歎せよ」。鳴、急やかに起信論を造って外小を破失せり。月氏の大乗の初めなり。

嘉祥寺の吉蔵大師は漢土第一の名匠、三論宗の元祖なり。呉会に独歩し、慢幢最も高し。天台大師に対して已今当の文を諍い、たちどころに邪執を翻破し、謗人・謗法の重罪を滅せんがために、百余人の高徳を相語らい、智者

大師を屈請して、身を肉橋となし、頭に両足を承く。七年の間、薪を採り水を汲み、講を廃し衆を散じ、慢幢を倒さんがために、法華経を誦せず。大師の滅後、隋帝に往詣するに、双足を挍摂し、涙を流して別れを告げ、古鏡を観見して自影を慎辱す。

業病を滅せんと欲して上のごとく懺悔す。

夫れ以んみれば、一乗の妙経は三聖の金言なり、已今当の明珠は諸経の頂に居す。

経に云わく「諸経の中において最もその上に在り」。

また云わく「法華は最も第一なり」。伝教大師云わく「仏立宗」云々。

予、随分、大・金・地等の諸の真言の経を勘えたるに、あえてこの文の会通の明文無し。ただ、畏・智・空・法・覚・証等の曲会に見えたり。ここに知んぬ、釈尊・大日の本意は、限って法華の最上に在るなり。しかるに、本朝真言の元祖たる法・覚・証等の三大師、入唐の時、畏・智・空等の三三蔵の誑惑を果・全等に相承して帰朝し了わんぬ。法華・真言弘通の時、三説超過の一乗の明月を隠して真言

両界の蛍火を顕し、あまつさえ法華経を罵詈して曰わく「戯論なり、無明の辺域なり」。自害の謬誤に曰わく「大日経は戯論なり、無明の辺域なり」。本師既に曲がれり、末葉あに直からんや。「源濁れば流れ清からず」等とはこの謂いか。これによって日本久しく闇夜となり、扶桑終に他国の霜に枯れんと欲す。

そもそも、貴辺は嫡々の末流の一分にあらずといえども、はたまた檀那の所従なり。身は邪家に処して年久しく、心は邪師に染まって月重なる。たとい大山は頽るとも、た

といい大海は乾くとも、この罪は消え難きか。しかりといえども、宿縁の催すところ、また今生に慈悲の薫ずるところ、存外に貧道に値遇して改悔を発起す。故に、未来の苦を償って現在に軽瘡出現せるか。

彼の閻王の身瘡は、五逆・誹法の二罪の招くところなり。仏、月愛三昧に入ってその身を照らしたまえば、悪瘡たちまちに消え、三七日の短寿を延べて四十年の宝算を保ち、兼ねてはまた、千人の羅漢を屈請して一代の金言を書き顕し、正像末に流布せり。この禅門の悪瘡は、ただ謗法の一科

なり。所持の妙法は月愛に超過す。あに軽瘡を愈やして長寿を招かざらんや。この語、徴無くんば、声を発して「一切世間眼は大妄語の人、一乗妙経は綺語の典なり。名を惜しみたまわば世尊験を顕し、誓いを恐れたまわば諸の賢聖来り護りたまえ」と叫喚したまえと、しか云う。書は言を尽くさず、言は心を尽くさず。事々見参の時を期せん。恐々謹言。

十一月三日

日蓮　花押

太田入道殿御返事